大田市　明神古墳出土資料について

仁　木　　聡

はじめに

島根県大田市仁摩町大字仁万（旧国の石見国邇摩郡）に所在する古墳時代後期後半の大型石室墳・明神古墳は、1984（昭和59）年に調査が行われ、その成果概要が公表されている（島根県愛護協会1987）（以下、愛護協会報告）。しかし出土資料については、脆弱な金属器の保存修復等を経る必要があったため、その多くが未公表であった。本稿は、2016年度から2019年度の島根県古代文化センター事業であるテーマ研究「国家形成期の首長権と地域社会構造」において、資料調査を実施した明神古墳の出土資料を報告するものである。第１章に地理的・歴史的環境、第２章で愛護協会報告と島根県古代文化センターに保管されている門脇氏の中間報告資料（以下、門脇資料）に依りながら、明神古墳の概要について報告する。次いで第３章で出土資料の報告、第４章で明神古墳の歴史的位置づけについて考察を行うこととする。

１．明神古墳の地理的・歴史的環境

明神古墳は、島根県中央部沿岸の大田市仁摩町仁万に位置する（図１）。大田市沿岸の海岸線は、標高50～70m前後の丘陵地が直接日本海に接し、複雑に入り組んでいる。その中にあって、仁摩平野は大田市の静門川水系下流域（大田市中心部）と同じく比較的まとまった規模の沖積平野が形成されている。

明神古墳は直径約20m、高さ３m以上の円墳である。墳丘は明治期以降に海側からの吹きつける砂の堆積によって埋もれていたが、本来は仁摩平野の北東側から突き出た山塊「俗称：明神山」からさらに西側に突き出た小尾根の先端の小高い部分（独立小丘陵）に単独で築造されたもので、近年まで古代条里制遺構の地割が残されていた仁摩平野（仁万田台）を南に眺望することに優れた立地となっている（図２）。なお、明神古墳が位置している地質は砂丘ではなく、島根県江津市付近を中心に広く石見沿岸部にみられる都野津粘土層である。ちなみに、明神古

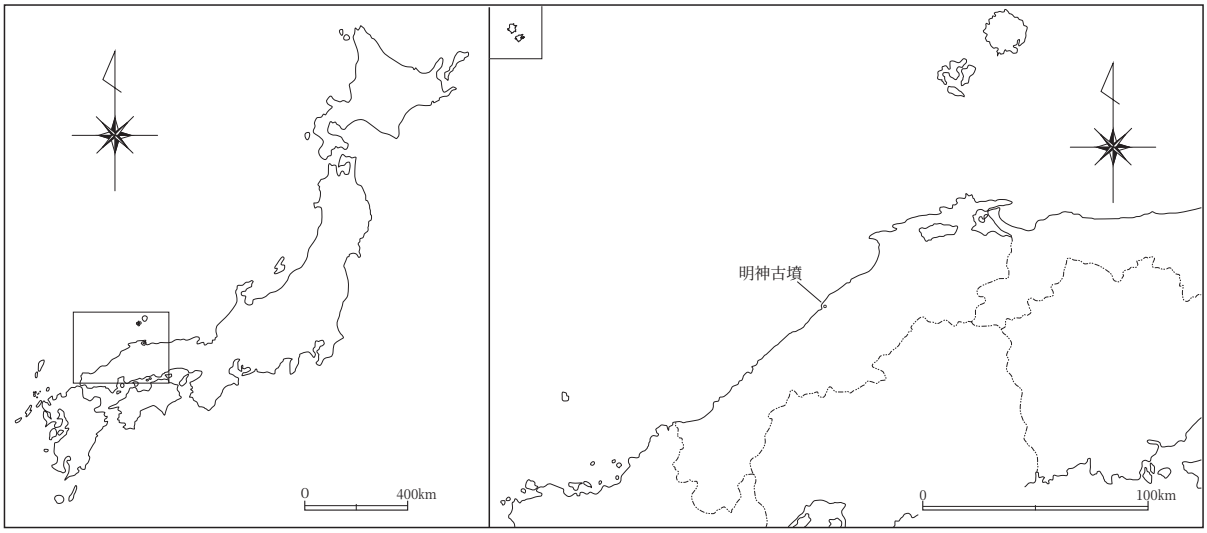


図１　明神古墳の位置

	遺跡名	概要
1	赤崎山横穴群	３支群約 25 穴
2	宝隆寺裏古墳群	約 11 基（８基消滅）、須恵器他
3	高浜古墳	須恵器
4	坂灘古墳	箱式石棺、人骨、鹿角装刀子、市指定史跡
5	毘沙門塚古墳	消滅
6	毘沙門遺跡	横穴?、須恵器
7	楡ノ木谷横穴群	３支群 12 穴、須恵器、土師器、耳環、玉類、Ｉ群保存
8	安養寺古墳群	４基、土壙、土師器、須恵器、壺棺、弥生住居跡
9	松林寺遺跡	古墳、須恵器、寺院跡
10	矢迫屋横穴群	３穴
11	千人塚遺跡	横穴式石室、墳形不明
12	庵寺古墳群	前期古墳、横穴式石室
13	鳥居原古墳	双龍環頭大刀、馬具、玉類、須恵器、消滅
14	宇福古墳	横穴式石室、須恵器
15	赤井穴ヶ迫古墳	石棺式石室
16	清石遺跡	多量の土師器が出土

図２　明神古墳とその周辺の遺跡（古墳時代）

墳の位置する標高は約38.2mで、仁摩平野の水田面との比高約差は35mある。また、古墳の西側には、仁摩平野を形成する潮川の河口部と野浦浜の港津が位置している。

次に周辺地域を含めた古墳時代の様相を記す。古墳時代前期・中期には、仁摩平野を含めた石見東部の沿岸部では大型の古墳は存在しないものの、仁摩平野南東部の丘陵上に位置する庵寺古墳群では、2基の前期古墳と土器棺墓1基が確認されている。組合式の箱式石棺からは、漢鏡4～6期に日本海沿岸西部に緩やかな分布が認められる中国前漢鏡（ここでは八禽鏡）や（岩本2014a）、鳥取県東部に集中する鼓形器台を用いた土器枕が孤立的に出土している（仁木2011）。このことから、日本海を介した広域交流を権力基盤とした地域首長の存在がうかがえる。同時期の安養寺1号墳も庵寺古墳群に類似する組合式の箱式石棺や土器棺墓が採用されており、墓制の共通性が仁摩平野各所で認められる。また、海浜部の坂灘古墳では石を2～3段に積み上げ、棺床に礫を敷き詰めた箱式石棺が埋葬施設に採用されており、人骨と鹿角装刀子が検出されている。棺内礫敷の埋葬施設と鹿角装刀子から、海人系の被葬者像が想起される。なお、詳細な実態については不明ながら、古墳時代前期の集落遺跡として、坂灘遺跡、立平浜遺跡、大寺遺跡、中祖遺跡、中期には清石遺跡、坂灘遺跡、ナメラ迫遺跡、猛鬼遺跡等が確認されている。このうち、仁摩平野に注ぐ潮川の右岸に位置する清石遺跡では中期の土器溜が検出されており、そこからは高坏や小型丸底壺の占める割合が高い多量の土師器がほぼ完形で出土している。清石遺跡は、潮川からの堆積によって仁摩平野が形成される上流部に位置し、庵寺古墳群にも近いことから、地域共同体による平野開発に伴う水源地祭祀等が行われた可能性も検討の視野に入れるべきであろう。

さて、古墳時代後期なると仁摩平野周辺では、北から赤井穴ケ迫古墳、明神古墳、鳥居原古墳、字福古墳などの有力古墳が築造される情況となる。赤井穴ケ迫古墳はすでに開口しており出土品が知られていないが、石見唯一の切石造りの横穴式石室墳である。出雲東部に集中する石棺式石室、あるいは出雲西部の切石石室の影響を受けたものであろう。赤井穴ケ迫古墳は港津や小平野を直接望む立地ではないが、北側に五十猛（磯竹）の港津（大浦）があり、石室開口方向の東直下には近世山陰道が位置することから、五十猛（磯竹）に権力基盤があったものと想像される。明神古墳は次節に譲るとして、鳥居前古墳はすでに破壊された横穴式石室墳であるが2017年に国の天然記念物及び名勝に指定された琴ヶ浜（鳴き砂の浜）に面した後背地に築造されており、双龍環頭大刀、鞍金具、玉類、耳環が出土している。石室天井石とおぼしき石が露出する南北15×東西12mの方墳である字福古墳は、終末期方墳の可能性が考えられる。その場合、字福古墳は鳥居原古墳に後続する首長系列墳と想定されるが、その実態は不明である。

これら4基の古墳は、石室規模や副葬品の様相からみて、仁摩平野周辺地域の有力首長層の奥津城と考えられるが、とくに明神古墳が所在する仁摩平野周辺には、楡ノ木谷横穴墓群、赤崎山横穴墓群などの有力家長層の墳墓も確認されていることから、明神古墳は仁摩平野の最高首長墳で、階層的な地域社会構造が形成されていた可能性が想定される。そのことは後述するように、宅野付近を中心に分布する安山岩が明神古墳の横穴式石室に用いられていることとも整合的である。

2．明神古墳の調査概要について

ここでは、前出の愛護協会報告と門脇資料に基づきながら、若干の補足説明を交えて明神古墳の調査概要を記すこととする。

（1）過去の発掘と調査に至る経緯について

門脇氏は『仁摩町誌』（仁摩町1973）に掲載されている国分寺霹靂神社の「由緒書上控」には、明神古墳が江戸時代に発掘された記録が記載されていると結論されている。このことを含めて、1985（昭和60）年までの経緯について、以下は門脇資料からの引用としたい（表記は原文のまま）。

◎1772年～1776年（安永元年～同5年）

「大森地方代官会田伊右衛門の命により、手代井上伝蔵が村中一同を差図してこの古墳を発掘する。石室内のあちこちを掘り、宝物が埋納されているとの言い伝えのあった石棺を掘り当てたが、蓋を取ったまま封印して埋める。（仁摩町誌）

※・「仁摩町誌」に記載されている国分寺霹靂神社の「由緒書上控」のこの記事は、神社からの位置、古墳の立地情況、古墳の現状等からみて、明神古墳についての記述に間違いないものと思われる。

・「由緒上書控」には「安永年中御代官会田伊右衛門様へ云々」とあり、安永年間における会田伊右衛門の代官在位が元年～５年であることから、この記事内容はこの間の出来事と考えられる。

◎1804年～1817年（文化元年～同14年）

仁摩村百姓政兵衛、神託ありと申して近隣の人々とともに再度石棺を掘り出し、須恵器１個を神社に納め、刀剣類３口をとり、他の出土品は石棺内に返納する。（仁摩町誌）

※・「由緒書上控」に「文化年中」とあるところから、この記事内容はこの間の出来事と考えられる。

・文中の「須恵器」「刀剣類」「石棺」の各語は、資料から推測して用いた用語である。

◎1870年（明治３年）

国分寺霹靂神社神官高木虎雄、同社の「由緒書上控」に発掘品の写図を付して上記の内容を記述する。

◎1877年（明治10年）

この年の12月、仁摩村がまとめた「神社明細帳」中の「国分寺霹靂神社」の項に、百姓柳原政兵衛の発掘についての内容を記述する。

※・この記載事項は、「由緒書上控」のそれと若干内容を異にする。

・なお、「神社明細帳」のこの部分には、ページ全体に大きく斜線が引かれている。

◎1880年～1960年

この間、砂丘地を畑地化するためにしばしばこの古墳の封土を客土として削り取ったし、また里人による小発掘が数度にわたって行われたが、特記する程の事柄は伝えられてはいない。

◎1962年（昭和37年）

この古墳は、この年の3月に島根県教育委員会が刊行した「島根県遺跡目録」に「明神古墳」として記載され、以後の遺跡目録改訂版にも同様に記載されて、行政上の所謂「周知の遺跡」となっている。

◎1972年（昭和47年）

この古墳は、この年の６月30日に刊行された「仁摩町誌」にも記載された。町誌では、「古墳時代」と「宗教」との両者にこれに関する記述がみられる。

◎1984年（昭和59年）

７月27日から12月16日までの間、現地において断続的に発掘調査を実施した。この調査は、開発事業に対処するための国庫補助事業による遺跡確認調査であった。

◎1985年（昭和60年）

１月～３月の間、遺物整理と報告書作成を進める。」

（２）墳丘

明神古墳の墳丘は、後述するように過去何回かの発掘によってほとんどが削り取られているが、周辺地形から円墳と考えられており、直径約20m、高さ３m以上あったと推定されている。特筆されるのは墳丘の築成で、約10㎝の厚さに粘土を固めながら盛り上げる版築様の技法が用いられていたと推定され、粘土の異様なしまりの状況から塩分（にがり）、木炭灰などの混入が予想されていることである。

第３図は門脇資料に含まれていた石室（石棺）の実測図（写）と、墳丘南北トレンチの東壁面の土層断面図（写）を再トレースした図である。墳丘のどこに設定された南北トレンチであったか等の資料は残されていないが、石室の主軸と直交するように設定されたと推察される。ここで門脇資料に記載のある墳丘の築成技法にかかる所見を引用する（表記は原文のまま、機関名・個人名を削除）。

「墳丘の築成技法についてみると、それは地山加工壇の上に封土を覆う技法によっている。つまり、明神古墳は、古墳築造のための選地に当たって小尾根先端部のやや盛り上がった地形の場所を選び、その部分の地山をあらかじめ壇状に加工して墳丘の基底部を造り、その中央部から東側に横穴式石室を設けるための堀り型を施し、そこに石室を造った後上

を封土で覆って墳丘の完成をみたものである。封土の盛り方は、単に土を覆っただけではなく、約10㎝程度の厚さに粘土をかためながらそれを重ねて盛り上げる技法によるもので、封土は異状にしまっていてきわめて固い。したがって、トレンチの断面は厚さ約10㎝の粘土帯が重なりあって縞状を呈する。さらに、粘土が異状にしまっているのは単なる土圧によるものではなく、粘土中に塩分（にがり）や木炭灰等を混入しているためであろうと思われる。このような技法は出雲市大念寺古墳においてすでに確認されており、明神古墳の封土についても分析作業が進行中であるので、近日中に混合の正確な結果が判明することになっている。

地山加工壇の中央から東側にかけて設けられた掘り型の中には横穴式石室が造られているが、堀り型の壁と石室の壁石との間にもやはり約10㎝の厚さの固くしまった粘土帯が重ねられている。この粘土帯は堀り型の上端まで重ねられており、ここまでの作業で墳丘下部の工程を終えている。次は加工壇と石室とを覆うための封土を積み重ねる作業であるが、この作業にも３工程の段階がみられる。その第１は、地山加工壇の上に粘土を覆って墳丘の形を整え、あわせて加工壇よりも高く突き出している石室の壁石を粘土帯を詰めることによって外側からかためるための作業である。それはまた、石室の上に天井石を載せるための基礎作業でもあったであろう。天井石を壁石の上端にまで運ぶためには、墳丘の盛土斜面を利用して引き上げなければならないからである。また、この工程は石室の壁石を積み上げる作業とも関連させながら進められたであろうと考えられる。次の第２の工程は完成した石室を覆うための作業であり、第３の工程は一応の形のできた墳丘に化粧土を覆って完成させる仕上げの作業である。これらの工程はいずれも墳丘の断面によく表れており、第３の工程では附近から採れる小角礫の混った黒色味の強い土を化粧土として用いている。粘土にそれを強く固める性質を持つ塩分や木炭灰を混入する版築様の技法は、封土を強固にして、石室内への水分の浸入を防ぐことと墳丘の強度を保たせることとを目的としていると考えられるが、このような技法は、山陰地方では最近６世紀以降の古墳に調査例がみられ、封土凝固技法とでもいえる注目すべきものである。」

以上の引用文は、第3図掲載の土層断面図の解題とすることができるが、若干の補足説明を行う。まず、旧表土が図の左側で切れるところが石室の掘り方である。石室の壁石と掘り方の間の粘土帯は、第3図には表現されていない。第３図の△のラインが石室完成後、すなわち天井石を架構した後の一次墳丘のラインである[(1)]。ここまでの墳丘築成が、門脇氏の報告する第１と第２の工程である。第３の工程である墳丘の化粧土は、攪乱や砂の再堆積によりほとんど残っていないが、門脇資料によると第３図の５層を化粧土と想定している。

（３）埋葬施設について

明神古墳は横穴式石室を内部主体とする後期古墳で、石室内には刳抜式の家形石棺が１基安置されている。以下は、門脇資料からの引用である（表記は原文のまま）。

①石室

「明神古墳の石室は、全長約10.1m、玄室長約6.7m、同幅2.0～2.4m、同高さ1.2～2.2m、羨道長約3.3m、同幅0.8～1.2m、同高さ1.1～1.3mを測る、東側に開口した石見地方最大の横穴式石室である。玄室と羨道との境には両側に柱石が立てられているので、一応両袖形式の石室ということができよう。しかし、柱石は両方とも側壁内に喰い込んではおらず、両壁を積んだ後に壁の内側に立てたもののようである。また、眉石も一応置かれてはいるが、柱石にはほとんど力が加わってはおらず、この古墳の柱石は形式的な存在でしかない。また、柱石を除いてみた側壁の状態は、羨道の向かって右側の壁が内側に寄る片袖の形状を程しており、一見両袖形式にみえるこの石室の基本型を片袖形式とみることもできる。玄室は縦に細長い形式であるが、両側壁の石のならべ方にはかなりの違いがみられる。すなわち、南壁が奥壁にほぼ直交して直線状に石を配しているのに対し、北壁の石の配列にはかなりの凹凸があって直線的ではない。特に最奥部においては、北壁の石が

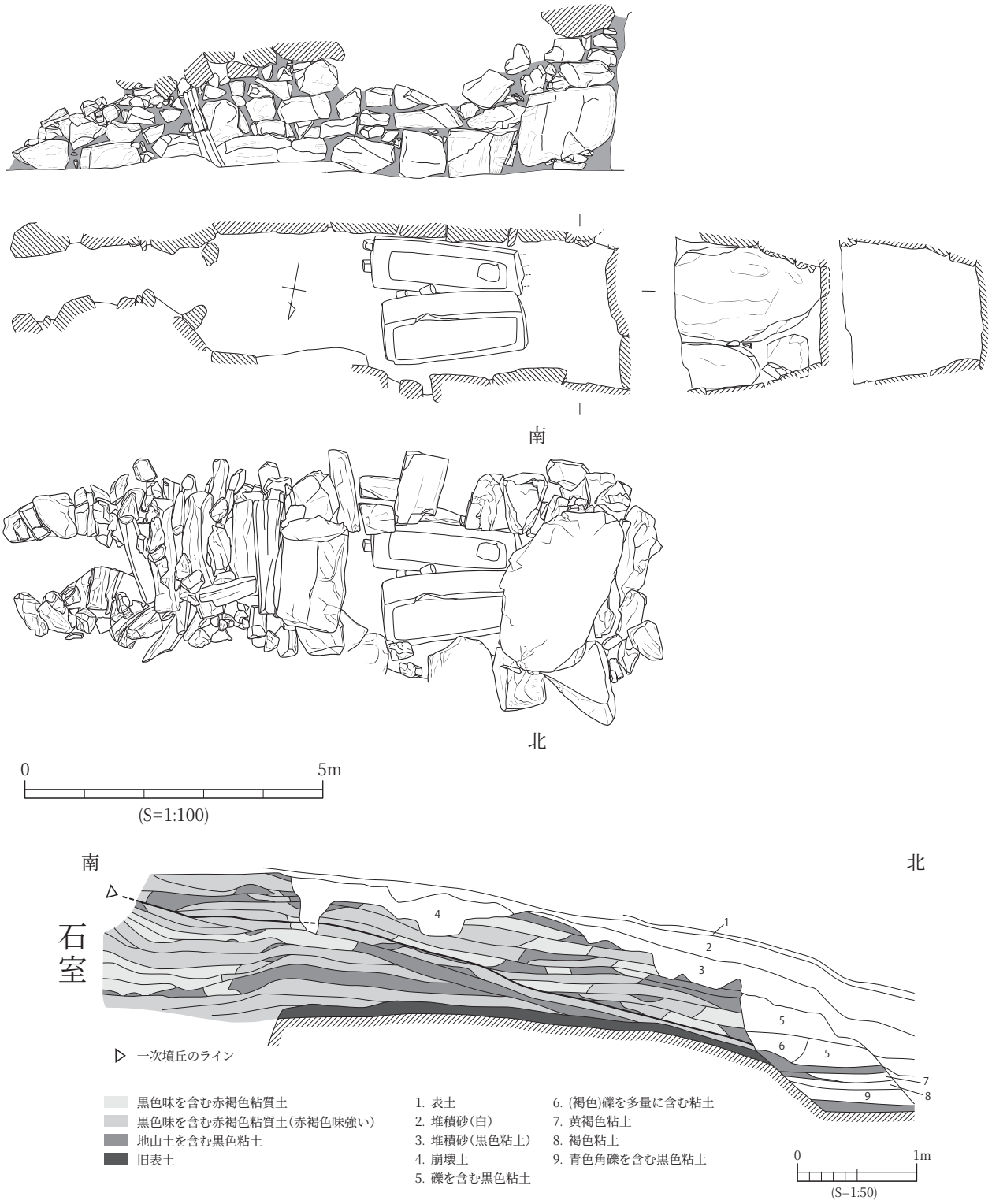


図３　明神古墳の埋葬施設と墳丘土層断面図

約20㎝北側に引っ込んでおり、この部分だけは玄室の幅が特別に広くなっていて、あたかも片袖上の様相を呈している。さらに注目すべきことは、この最奥部だけは両壁とも玄室の他の部分の側壁と石の積み方を異にしている事実である。玄室の奥部以外の側壁の側壁においての石の積み方を見ると、最下段の腰石の上面とその上に重ねた１～２段の積み石の上面とに横目地を通しているが、最奥部の約２ｍの部分だけにはこのような横目地は見られず、両者の間には縦目地が通っていて、最奥部の壁はほかの壁に先立って独立して上まで積み上げたであろうことを物語っている。一方、石室の高さについてみると、過去の発掘の際に玄室中間部分の天井石が数枚取り去られているし、またこの部分の側壁もかなり破損しているので、今日においては最奥部の天井石と前部のそれとの配列の関係を十分に把えることは困難ではあるが、奥部の石室高が前部のそれに比していちじるしく高いことから、奥部だけは特別に天井を高くしていた可能性も強く、この部分には玄室内でも特別の位置付けがなされていたのではないかという想定に導かれるのである。

次に天井石の置き方についてみると、主要な石材は現存するもの７個で、これらの石を左右両壁に載せて石室を覆い、各石の間隙には多くの栗石を詰めて空間を塞いでいる。ただし、玄室の中間部約３ｍの間の天井石は取り除かれていたので、この位置に使用されていた石材の数やその在り方については明かではない。現存する主要天井石７個のうち、最奥の１個と取り除かれた部分をはさんだ前側の次の１個とはきわめて大きな巨石であり、その前に続く５個の石はこれらの巨石に比していちじるしく小さい。２個の巨石について注目すべきことは、いずれもきわめて厚い自然石のあちこちを部分的に打ち欠いて四注式の屋根形を呈するように部分加工し、それを石室の上に平入り状に置いていることである。しかも、最奥の石は内側が屋根形の傾斜をもつように前下がりに置かれているし、前部の巨石も裏側の自然形とその前に続く石との組み合わせで内側が屋根形を呈するように置かれている。このような事実から、天井に巨石を置いたこの両部分は家形の意識をもって造られていると考えられる。石室内に安置されている家形石棺は、両巨石の間の天井石が取り除かれている位置の内部から検出されたが、それは多分当初からほぼこの位置に安置されていたであろうと思われる。これらの事実を総合してみると、異状に細長い形状を呈するこの古墳の玄室は、家形石棺（玄室中央部）とその両側の屋根形の天井石が置かれている位置の内部（玄室の奥部と前部）との３カ所に意識的に区切られていて、当初からこの３カ所に遺体を埋葬しようと計画し設計されたものではなかったかと考えられるのである。

天井石として使用されている石の材質は、最奥の巨石１個を除いてはいずれも柱状節理をもつ安山岩で、この石材は仁摩町内の宅野附近に分布している。最奥の１個は粗粒玄武岩で、この石は宅野と大田市五十猛町との境界附近や町内の坂灘周辺にその分布をみるようである。なお、７個の主要天井石のうち、前側から３番目のものは玄門を構成する眉石をも兼ねて用いられている。次に石室の壁石についてみると、奥壁は３個の巨石から成り、これらの石材はいずれも安山岩質のものである。また、左右両側壁も安山岩質の石材が用いられている。側壁は、腰石に巨石を用い、その上にやや小形の石を積み、天井に近い部分にはさらに小形の石を配して造られているが、下から２～３段目までの石はいずれも奥行きが１ｍ以上もある大きなもので、各石はこれだけで十分に安定していることから、石室全体に控積みの石はあまり多くは用いられていない。一方、羨道部は玄室に比して幅も高さもきわめて小さく、また造りも粗雑であり、石材も小形のものが多く使われており、玄室を構築した後に前側へ継ぎたして造ったものであろうと思われる。

次に床面についてみると、羨道部の床面には敷石はみられないが、玄室部には過去の発掘によって破壊された床面の一部にスレート状の石の痕跡がみられることから、当初はスレート状の石を敷き詰めていたものと考えられる。また、床面には石室全般にわたって敷土がみられ、掘り型の上面に全体的に粘

土を置いて床面を形成し、玄室部ではその上に敷石を施していたもののようである。なお、羨門部はすでに開口していたので、閉塞状況の詳細について明かにすることはできなかった。ただ、前庭部に黒色の粘土が残されていたことから、この部分には同様の粘土を詰めて閉塞施設の前側を塞いでいたものと考えることができる。」

②石棺

「玄室中央部に安置されていたと思われる石棺は、蓋石を取ったままほぼ原位置に近い地点から検出された。棺身は、過去の発掘の際に下の床面も掘り起こしたため北側寄りに傾いていたが、当初はおそらく石室の中軸線上に安置されていたであろうと考えられる。なお、この石棺の出土状況は「由緒書上控」記載の内容と合致していてきわめて興味深い。

石棺の規模についてみると、棺身の最大部は、外測長2.36m、同幅1.02m、同高0.7m、上端内測長2.04m、同幅0.6m、底部内測長1.9m、同幅0.5m、深さ0.4～0.46mを測り、蓋の最大部は、長さ2.5m、幅1.06m、高さ0.36mの大きさで、棺身よりも蓋のほうがやや大きめに作られている。石棺の材質は流紋岩質凝灰岩で、この種の石は仁摩町内の天河内地区にその分布をみる。

棺身は、一石を刳り抜いた箱状のもので、外形は丸味を有し、壁は垂直ではなく中膨らみに作られている。底部も丸味が強く、四壁との境界には明瞭な陵線を認めることができない。平面形も中膨らみ状に作られていて、直線による構成にはなっていない。突起は認められないが、ノミ痕をよく留めており、中膨らみの最大位置から下の部分は仕上げが十分に施されてはいない。内側底部の作りは平面的であり、ヤリガンナによる磨きがよくかかっていて丁寧な仕上がりになっている。また、主軸方向の一方には水抜きの孔がみられる。

蓋は四注式寄せ棟の形式に属し、頂上の長方形面の幅は約5㎝できわめて狭い。主軸方向の両側には各2個づつの縄掛突起があるが、一方の2個は根元から折れている。ただし、折れた突起部分は2個とも残存していて、その形状等を確かめることができる。蓋の断面形をみると、頂上から15～28㎝下がった位置の四周には明瞭な陵線が施されていて寄せ棟の斜面部分とその下側との界線になっているが、下側の部分は垂直線よりもやや内側に内傾している。縄掛突起の取り付け位置は、いずれも斜面部分と下側部分との両側にほぼ半分づつかかっており、突起の向きは水平に近い。また、突起の長さはいずれも20㎝余りであり、その形状は基本的には円形であるが、作りが粗雑でかなりいびつな形状を呈している。また、蓋の内側もやはり四注式寄せ棟の形状に刳り抜かれているが、棟線はかすかに認められる程度である。

この明神古墳の石棺は家形石棺の類に属するが、その形状は舟形石棺に近いものであり、山陰地方では他に類例を求めることができず、全国的にみても福井県竜ヶ岡古墳等に若干みられる程度であって、今後の家形石棺の研究上きわめて重要な資料であるということができる。」

なお、補足すれば、棺蓋にみられる方形の孔は盗掘によるものと考えられる。

（4）出土遺物の概要

門脇資料には、愛護協会報告では記されていない遺物の出土状況について、その概略が記されている。以下は門脇資料の記載である（表記は原文のまま、機関名・個人名は削除）。

「経緯の章でも述べたように、明神古墳は過去再三にわたって発掘が試みられたために内部の荒れがひどく、副葬品の多くはすでに失われたものと考えられるが、それでも今回の調査において若干の残存遺物が検出された。遺物が最も集中的に置かれていた場所は玄室の西北隅と東南隅との2ヶ所で、この外には石棺の中とその周辺・前庭部・墳丘面から若干の鉄器片・須恵器片・陶器片が出土したのみである。集中して置かれていた2カ所の遺物の出土状況についてみると、当初から置かれていた状態としては不自然な点がきわめて多く、大部分は二次的に動かされたものが残存していたとみるべきであろう。出土した遺物を表示すると次のとおりである。

遺　物 出土位置	出土遺物
玄　室 東南隅	大刀残欠１・大刀片若干・**大形鍔１・短刀１**・鉄銭５・**刀子１・鏡鑑片？２・耳環１・須恵器類３（大型提瓶・瓹・高台付壺）**須恵器片若干
玄　室 西北隅	金銅装円頭大刀１・大刀片（鍔付）１・大刀片若干・**鉄鏃片２銅碗１**・須恵器類２（**提瓶**・坏蓋）・須恵器片若干
その他	**鉄器片若干・須恵器片若干**・印判手藍染茶碗片１

※太字の出土遺物のみ現存（仁木追記）

これらの遺物の中には金銅装円頭大刀のような豪華な品も含まれており、古墳の規模とも相まって、この古墳の被葬者の社会的地位を想定することができる。また銅碗のような稀有の品も含まれていて、古墳時代の遺物研究の上に貴重な資料を加えた。須恵器は一般に時代判定の資料として使われているが、ここから出土した須恵器類５個の間には若干の時間的幅がみられ、６世紀後半初頭から７世紀初頭にかけてのものが含まれている。しかし、遺物の出土状態が二次的移動の跡を留めていることから、他の遺物との共存関係については明瞭ではない。古墳の築造時期については出土した最古形式の須恵器の時期を目安とすることができるが、一方現在この古墳の残留磁気による年代分析が進行中であるので、いずれその結果と須恵器の編年との両面から古墳の築造時期を詳細に検討することになるであろう。

この古墳の横穴式石室は山陰地方の石室の中でも屈指の規模のものであり、また石室の様相や内蔵する石棺の形態も当地方においては他に類を見ないものである。」

３.明神古墳の出土資料について

前章の門脇資料で報告されている出土遺物のうち、門脇資料に報告されていない出土遺物も一部含まれているが、現存する明神古墳出土資料として報告する。また、門脇資料の写真資料にある所在不明の資料についても若干の説明を行う。

（１）須恵器（図４・明神古墳出土品（１））

瓹：図４-１の瓹は、玄室東南隅から出土したものである。口径12.2㎝、器高15.6㎝、胴部最大径は10.1㎝である。頸部には上部側に一条の沈線が施されている。頸部の文様構成は瓹２段型（吉田2007）で、上段には櫛状工具を水平方向に浅くひきながら連続した刺突文がめぐる。下段は、しぼりと水平方向のナデ痕跡が認められる。肩部には二条の沈線による文様区画があり、櫛状工具をやや強くひきながら連続する刺突文がめぐる。底部はタタキ後にナデが施され、部分的に不定方向の静止ヘラケズリが施されている。色調は良好で、暗青灰色を呈す。浜田市・益田市に分布の中心がある石西型の瓹とされ、石見４期（TK43型式期に接点のあるＴＫ209型式併行）の編年観が提示されている（岩本2019）。

提瓶ほか：図４－２は台付の長頸壺である。脚部が短いため、TK209型式期以降と考え得る。口径7.3㎝、器高17.5㎝、胴部最大径は12.9㎝、内面は回転ナデ、外面は回転ナデと胴部下半に回転ヘラケズリが施されている。焼成は良好で灰色を呈す。図４－３は、短頸壺の一部である。口径7.6㎝、肩部の最大径14.8㎝で、内外面とも回転ナデを施している。焼成は良好で灰色を呈す。図４－４の提瓶は、口径5.8㎝、器高19㎝、胴部最大幅は15.3×10.8㎝である。頸部内外面の調整は回転ナデ、胴部は平行タタキののちカキメを施している。把手は鉤状で頸部に接するように付加されている。焼成は良好で青灰色を呈す。図４－５の提瓶は、口径8.4～8.8㎝、器高26.4㎝、胴部最大幅21.8㎝×16.0㎝である。口縁端部は外方に引き伸ばして成形している。胴部外面の一部にタタキが見られるが、最終的にカキメ調整が施されている。頸部と胴部は別造りで、合一成形後に水平方向のカキメを施し、頸部に接した環状の把手を付加している。焼成は良好で青灰色を基調とし部分的に暗青灰色を呈す。図４－４・５とも、石西系の提瓶とされ、石見4期の編年観が提示されている（前掲岩本）。

明神古墳出土品（１）－５の坏蓋は、現在所在が確認できない資料である。写真からは口縁部の形態や天井部の調整等、判然としないが、プロポーショ

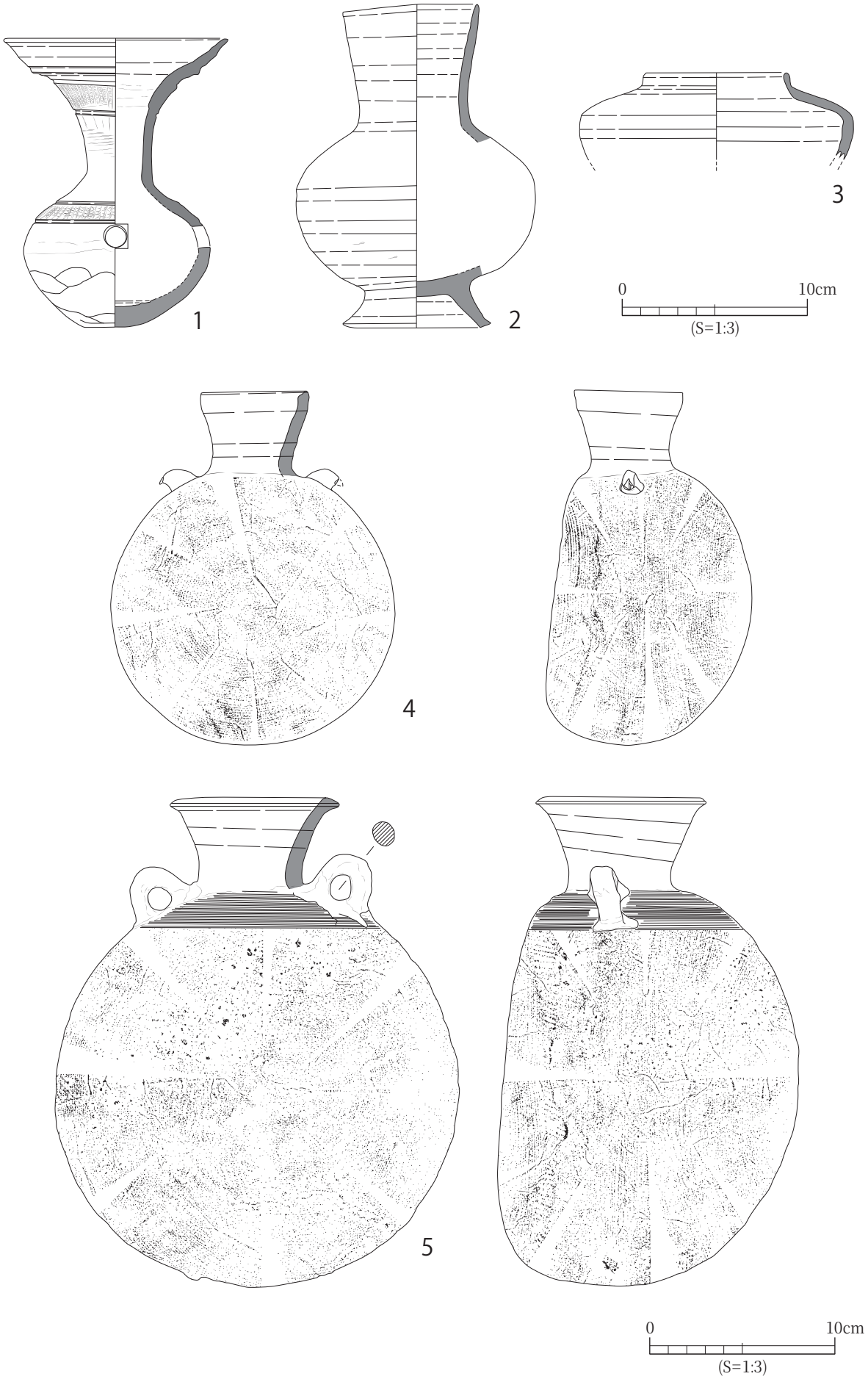


図４　明神古墳出土資料（１）

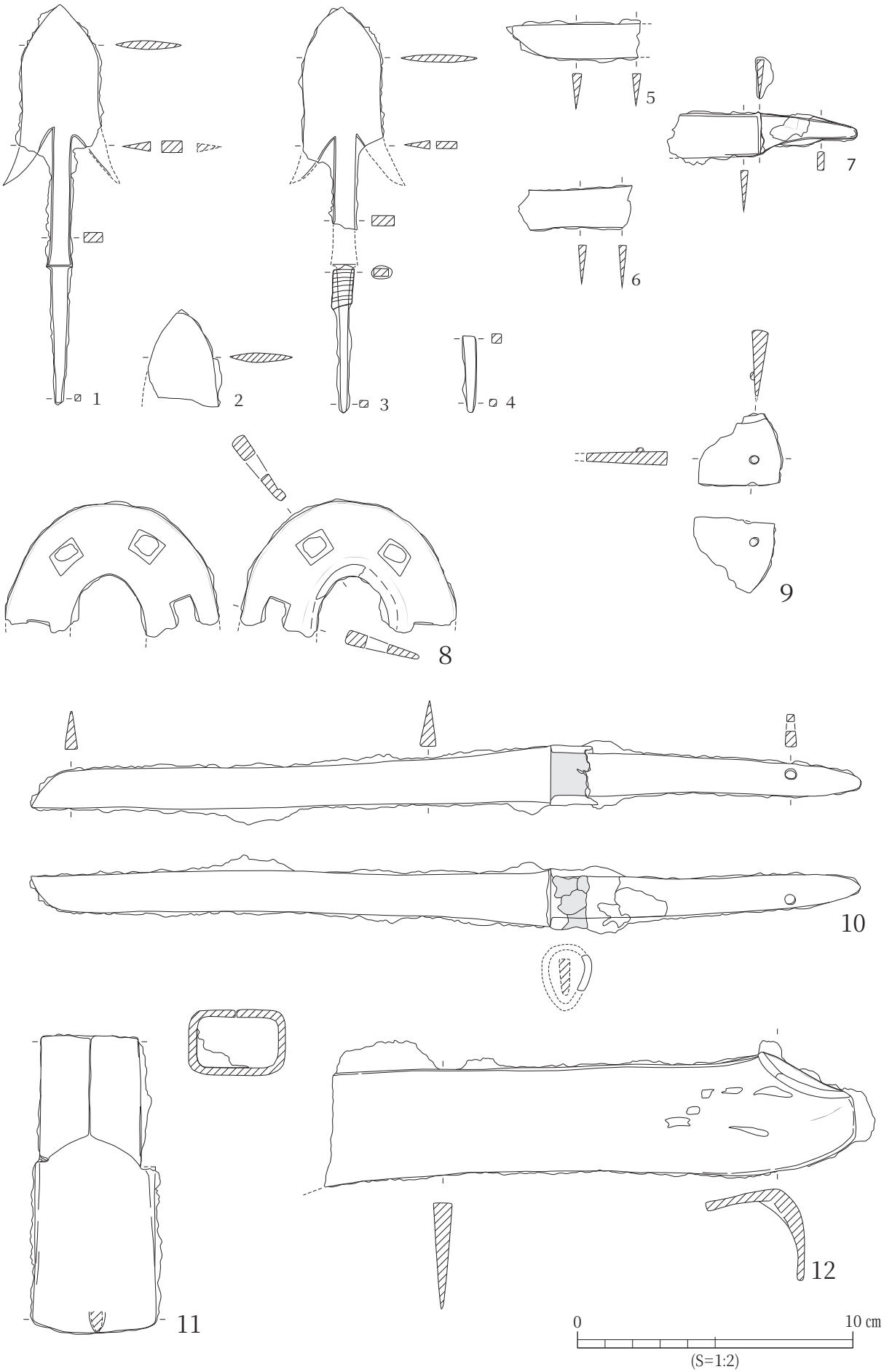


図５　明神古墳出土資料（２）

ンから石西型（石見４期）の坏蓋である可能性が高い（前掲岩本）。

（２）金属器（図５・６、明神古墳出土品（２）－（４））

鉄鏃：図５－１～４は、鉄鏃の一部である。図５－１・３は短頸腸抉柳葉形鉄鏃に分類され、京都府北部～山陰地域に共通する地域的特徴が指摘されている台形関（土屋2018）の短頸鉄鏃である。ほぼ完形の図５－１は全長14.5㎝、身部長は逆刺を含めた復元長で6.5㎝、身部幅2.7㎝、身部厚0.3㎝、頸部長5.0㎝、茎部長4.9㎝である。門脇資料によると、玄室西北隅で出土した鉄鏃と考えられる。また、実資料の所在は不明であるが、図版の明神古墳出土品（４）－13から平根鏃1と片刃の長頸鏃１の出土が確認できる。前者の平根鏃は図５－１とほぼ同じ全長14.5㎝程度と推察され、短頸ナデ関柳葉形鏃に分類されるもので、畿内をはじめ倭の各地で広くみられる形式である（前掲土屋）。なお管見の限りではあるが、本資料と酷似する同形式の類例が松江市の御崎山古墳と古天神古墳、米子市の宗像１号墳等の後期の地域首長墳に副葬されている点は、注目される。また、後者の片刃長頸鏃は棘関であることからＴＫ43型式併行期以降の所産と考え得る（豊島2003）。同じく、これと類似する資料が、出雲西部の大首長墳系列である大念寺古墳と上塩冶築山古墳の副葬品に含まれていることも、重視したい。

刀子：図５－５～７は刀子で、同一品の可能性がある。なお、門脇資料によれば、玄室東南隅から刀子１の出土が報告されていることから、本資料はその資料である可能性が考えられる。ただ、現状では相互に接合面が遺存しておらず確証は得られないが、同一品とすれば（明神古墳出土品（３）－９を参照）、

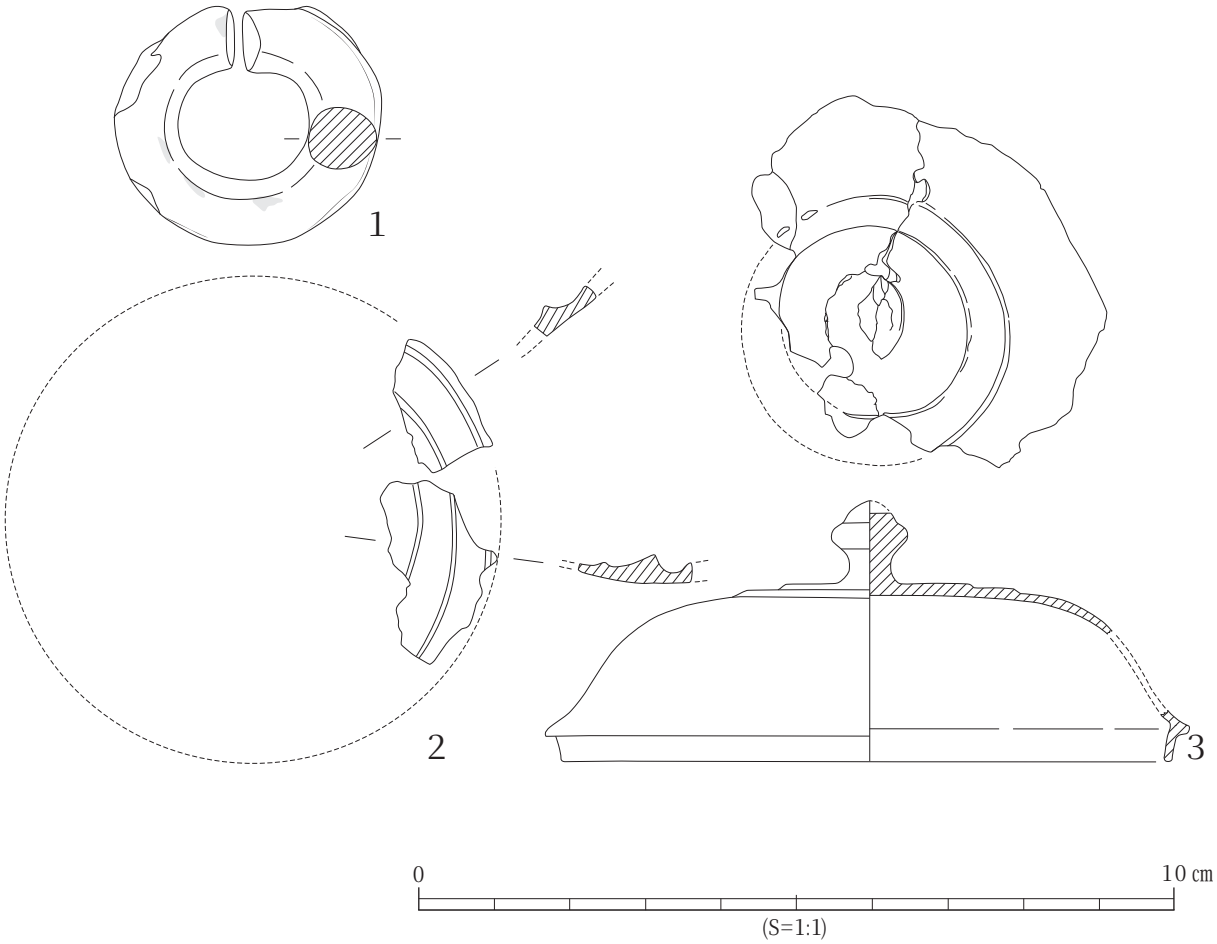


図６　明神古墳出土資料（３）

復元長で約16.0㎝、刀身の最大幅は1.5㎝、片関で中茎の長さは3.5㎝となる。

鍔：図５－８は鉄造りの六窓透と考えられる板状の有窓鍔で、門脇資料の報告にある玄室東南隅の出土品と考えられる。部分的に鉄製の柄縁金具が認められる。これに伴う大刀は不明である。

鉄刀：図５－９は鉄刀の一部と考えられる鉄片である。目釘が残存しているので、中茎部分と考えられるが、現状の形状では判然としない。

短刀：図５－10は、金銅装責金具の痕跡を残す短刀である。刀身長18.9㎝、刀部最大幅2.1㎝、茎部長11.2㎝の両関で、直径0.3㎝の目釘孔が1孔のみ観察できる。刀身が内湾していることから、研ぎ出しも含めて長期間使用されていた可能性がある。門脇資料の報告にある玄室東南隅の出土品であろう。

金銅装圭頭（円頭）大刀：明神古墳出土品（２）－６・７も、現在は実資料が確認できない資料である。門脇資料によると、玄室西北隅から出土した資料である。写真図版を見る限り、柄頭は圭頭大刀のそれに類似する形態である。ここでは圭頭大刀と報告しておく。柄頭本体の内郭には、透かし文様のある薄い金銅板をはめ込んでおり、目釘孔が確認できるが、柄頭外郭の合わせ目に文様帯は施されていないようである。なお、透かし文様は円形や花弁様のようなものが見受けられることから、花形文、日輪文、火炎文が類推されるが判然としない。鎺と鞘中金具にはそれぞれ縫込み式佩用装置を認め得る。鞘尻金具は鞘尻まで遺存していないので、鞘尻の形状は不明である。また、柄や鞘の装飾等は不明である。茎尻は一文字尻で、茎尻の近くに目釘（孔）が確認できる。鍔・柄・鞘の拵えや装飾は不明である。以上の間接的な情報であるが、圭頭大刀とすれば、柄頭は菊池分類のB1類の可能性があり、また、圭頭大刀Ⅰ期（６世紀後葉）に副葬される円墳の平均直径が21.7mの大型円墳とされていることから（菊池2010）、直径20mの明神古墳例も条件的にはこれに該当する。

以上から、TK209型式期を中心とする時期が考えられる。一方、円頭大刀の観点から佩用装置の特徴をみれば、倭風円頭大刀Ⅰ系列（大谷2018）にあって、TK209型式併行期の範疇に含まれる。

農工具：図５－11・12は門脇資料には報告されていない資料であるが、図５－11は明神古墳出土品（２）－８の写真に含まれている資料である。図５－11は有袋鉄斧である。袋部長4.5～4.7㎝、刃部長7.2㎝、刃幅4.4㎝、刃部厚0.4㎝～0.5㎝を測る。板状の鉄板一枚から造られており、刃部は水平方向に数㎜程度の肩を有し、袋部の断面形状は隅丸長方形で、袋部の合わせ目は丁寧に鍛接されている。合わせ目の開き具合は、やや内湾気味の八の字状を呈している。図５－12は無茎の曲刃鎌で、基部から身部にかけて背はほぼ一直線であるが、先端部は失われている。基部の折返しは長さ3.4㎝程度の角折返しである。残存長19.3㎝、刃幅は3.8～4.1㎝を測る。

耳環：図６－１の耳環は部分的に銀鍍金が残存しており、それ以外は緑青に覆われ重みがあるので、銅芯の中実耳環と考えられる。外径6.2×7.0㎝を測る。門脇資料による玄室東南隅の出土品である。

鏡：図６－２は鏡の一部で２片が遺存している。接合関係はないが二条の重圏文が認められる。遺存状態は不良であり、肉眼では鋸歯文や櫛歯文等は観察できない。小さな破片は外縁端部が遺存している可能性があり、その場合の直径は少なくとも6.5㎝程度、端部が死んでいると判断すれば、外縁が平縁と仮定した場合、推定直径7.5～8.0㎝程度の仿製鏡と考えられる。

銅鋺：図６－３は銅鋺の蓋である。宝珠つまみで天井部には二段のアクセントがある。肩部以下は遺存していないが、鋺身に詰まった粘質土の土塊に蓋の口縁部が部分的に入り込んでいたため、一定程度の復元を行った。推定で受部径約8.5㎝、口径7.7㎝、器高3.4㎝を測る。また、この土塊から鋺身を復元すれば、口径8.5㎝程度、器高約５㎝前後が推定されるが、土塊だけの情報ではプロポーションが多分に想像的となるため、図化はしていない。遺存状態が悪いことから、その形状・法量と併せて国産段階（本資料は桃﨑編年ⅢB期＝TK217型式段階）の製品と考えられる（桃﨑2020）[2]。

４．明神古墳の歴史的位置づけ

１）石室・石棺からみた明神古墳の特質

門脇氏も指摘するように、石見最大規模の横穴式石室を有した円墳である。石室は形骸化した両袖式の横穴式石室で、痕跡的な玄門立柱石を伴う縦長の石室プランを有する。奥壁は大形の石材を縦方向に用いるが、本来は一枚石を用いる志向であったと思われる。また、天井石は奥壁から羨道に向かって下がる形態をしている。このような天井石の構造は大田市・行恒古墳の石室（島根県八上高校古墳研究会2012）にも通底する。

また、詳細は第２章の門脇報告に譲るが、門脇氏は石室プランが細長い理由に、「家形石棺（玄室中央部）とその両側の屋根形の天井石が置かれている位置の内部（玄室の奥部と前部）との３カ所に意識的に区切られていて、当初からこの３カ所に遺体を埋葬しようと計画し設計された」可能性を指摘している。そして、玄室奥と玄室手前の天井石が家形を意識したものであったことを指摘している。一般的には６世紀後半以降の横穴式石室の天井石は、平滑なものを志向していることからすれば、明神古墳の天井石は異質であり、注目される。

石棺については、出雲東部地域に類似する頂部平坦面が狭い石棺蓋形態（角田2004）が採用されており、棺身は横断面形が台形状で棺床の厚みが厚いことから、畿内系石棺の出雲西部の上島古墳例や、因幡の高野坂９号墳例、但馬の二見谷１号墳例に類似する要素や規格を有している。また、棺蓋が棺身より幅広く、小口側に円形断面の縄掛突起を付加するのも大きな特徴である。TK43型式～209型式併行期の家形石棺で、棺蓋の小口側にのみ縄掛突起２個を有する例として、三重県の鳥居古墳例をあげることができるが、副葬品から７世紀に比定されており、縄掛突起は方形断面で、直接的な地域関係は保留したい。明神古墳の家形石棺は、畿内系の家形石棺を志向しながら、出雲・因幡・但馬の山陰東部の地域的要素を取り入れた独自の石棺（片方の小口に水抜き孔が存在する）と考えることができる。なお、五十猛の赤井穴ケ迫古墳の埋葬施設が、出雲東部の石棺式石室（出雲古代研究会1987）、あるいは出雲西部の切石石室（大谷2001）の影響を受けている可能性があることは、明神古墳の石棺の通交先（山陰東方志向）と同調的といえる。

２）出土資料からみた明神古墳の特質

まず、明神古墳の築造年代について検討する。前章で記したように須恵器は概ねTK43～TK209型式併行期の所産であり、石見西部産の須恵器である可能性が高い。改めて金属製品からこれをみれば、鉄鏃はTK43～TK209型式併行期にあり、金銅装圭頭（円頭）大刀、銅鋺はTK209～217型式併行期にほぼ限定される。このことから、明神古墳の築造年代は、TK43型式併行期を上限とする古墳時代後期後葉に求められ、追葬を含めてTK217型式併行期にほぼ収まる古墳時代後期後葉～終末期、実年代の目安としては、６世紀後葉から７世紀前葉の年代観と結論される。

また、明神古墳の副葬品は多種におよんでいる。まず、鉄鏃は山陰から京都北部のみならず、若狭・北陸にも同様の形式が散見されることから[(3)]、日本海側のかなり広域的な地域性を有した平根鏃と評価でき、山陰東部では出雲西部の大首長墳に副葬される長頸鏃も含まれていることから、首長間の接触を含めて広域に及んでいた可能性を指摘できる。

一方、仿製鏡については、山陰の後期・終末期古墳に副葬されている事例の検討から、銅鏡の流通と保有は、あくまでも畿内地域を中心とした広域におよぶ関係性を示すと評価されている（岩本2014b）。明神古墳の仿製鏡も、畿内地域、すなわち倭王権からの入手が考えられる。

さらに、銅鋺を副葬する山陰の古墳は、明神古墳を含めてＴＫ209型式新段階～ＴＫ217型式併行期を中心に鳥取・島根の山陰両県で６例（因幡２例、隠岐２例、出雲１例、石見１例）にすぎない。６例中４例が地域の終末期首長墳であり、うち２例が横穴墓（隠岐知夫里島の多沢横穴墓、出雲西部の上塩冶横穴墓群第23支群５号穴）の出土である。これらは畿内からの直接入手が考えられる。そのことは、銅

鋺と共に圭頭大刀が副葬される黒本谷１号墳（因幡）、装飾大刀の装具が確認されている谷奥１号墳（因幡）、銅製帯金具や畿内系暗文土師器等を副葬する大座西２号墳（隠岐島後）から傍証される。明神古墳副葬の金銅装圭頭大刀も、島根県の装飾付大刀の集成的研究（松尾2001、大谷・松尾2004、平石・松尾・佐藤編2005、大谷2019）や圭頭大刀に関する研究（前掲菊地）等に鑑みれば、銅鏡・銅鋺と同様に倭王権中枢やその周辺からの入手を考え得る。

そのほか、鉄斧や曲刃鎌の農工具が副葬されている事実も注目される。古墳時代の鉄製鋤・鍬先のように、被葬者の開発指導者的な性格を暗示させる器物（三木2004）とみなせば、当該期に農工具の副葬が減じる中にあっても、出雲西部の大念寺古墳と妙蓮寺山古墳、隠岐の大座西２号墳にも、それぞれ鉄斧が副葬されていることと併せて示唆的である。

３）島根県における後期古墳とミヤケ

ところで、山陰における横穴式石室の導入等の新たな墓制の開始については、畿内や九州北部・中部勢力との多様な通交関係が契機になっていることが指摘されてきた（角田2007・2009など）。明神古墳が位置する石見においては、石見各地の政治勢力が個別にヤマト政権や他地域の勢力と接触をしたと評価されており（渡邊2005）、石見益田における鵜ノ鼻古墳群等の分析でも、６世紀中葉以降には王権を中枢とする主要勢力が個別的に交通関係を構築しつつ地方支配を行ったと予察されている（池淵2015）。このことは、大きな平野がなく山また山という石見の地形が石見という地域概念、政治的統一を阻んだ要因であった（前掲渡邊）。すなわち、出雲東部・西部、伯耆東部のような複数の郡域を領域とした高位の首長を頂点とする階層秩序は認められない（大谷2011）。とくに出雲東西のように、地域首長墳の墳形・規模、石室・石棺の形態と規模、副葬品の様相から、これらの被葬者（集団）と倭王権の直接的通交が指摘され、古代氏族とその政治的階層構造の解明が試みられている研究状況とは（大谷1999・2019、平石2004）、対照的である。

しかし、近年では古墳時代後期における山陰沿岸の地域首長台頭の背景に対して、倭王権との直接的・個別的「通交」、倭王権による「開発」・「交通」等の地域拠点化－ミヤケ（屯倉）の設置－に対する個別具体的な考察がなされている。すなわち、文献・古代史による考察（平石2019）、島根県沿岸地域の概況（菱田2019）、継体・欽明朝を画期とする日本海交通拠点と開発（仁木2016・2019a・2019b）、出雲平野の水利開発（池淵2019a）、出雲東部周縁部における王権の屯倉的地域（製鉄・玉作等の手工業生産）と、出雲東部意宇郡中枢の首長による部民・屯倉の管掌（池淵2019b）、大田市静間川水系一帯の地域開発（松尾2019）、石見（吉松2019a）、隠岐（吉松2019b）における歴史的再評価が進行している。

表１は、上記各氏の成果を踏まえて、ミヤケ（屯倉）遺称地の可能性のある関連史料・地名等と地理的整合性を検討できる島根県内の後期古墳（首長墳・横穴墓・群集墳）をまとめたものである。当該期の首長墳等が、すべて都合よくミヤケ遺称地や資史料と対応するわけではないが、今後県内及び山陰各地の後期古墳とその地域を検討する上で、参考になるものと考え作成した。単独で築造される首長墳は、前代の首長墳が希薄、もしくは前代の首長墳と時間的断絶があることも特徴の一つである。また、出雲平野を領域とする出雲西部勢力とは対照的に、出雲東部の大首長墳や有力首長墳（大型方墳）が築造される意宇郡中枢（大庭・山代古墳群、有・大草古墳群）では、ミヤケとの関連がみえにくい。このことは、出雲東部では５世紀段階に大橋川沿岸で首長墳の集中的築造や前方後方墳を共通墳形とする地域社会構造の形成が行われていることから（島根県古代文化センター2015）、王権によるミヤケの設置は、意宇郡中枢ではなく、周縁部の有力首長の領域や、前掲の池淵2019bが指摘する王権が関与した手工業生産地に限定されたのかもしれない。

さて、明神古墳に話を戻せば、明神古墳は６世紀後葉に築造され、７世紀前葉まで追葬が行われた仁摩平野周辺の最高首長墳であり、墳丘と石室・石棺の規模、副葬品の様相からみて、倭王権をはじめ、広く山陰各地の政治勢力と交流を持ち得た被葬者の

表１　島根県内におけるミヤケの古墳（後期首長墳）

地域	古墳名	墳形・規模・主体部	時期（須恵器型式）	所在地	ミヤケ（屯倉）遺称地名等	関連論考
隠岐（島前）	立石古墳群（１号・２号）	不明	後期末～７世紀前半	西ノ島町美田尻	「美田」・「美田尻」・（智夫郡美多郷）	勝部1986・吉松2019b
安来平野	かわらけ谷横穴墓・鷺の湯病院跡横穴墓・高広横穴墓・臼コクリ横穴墓・鳥木横穴墓・中山横穴墓	横穴墓	後期後葉～７世紀前半	安来市	「大舎人」（『出雲国風土記』意宇郡舎人郷の郷名由来記事）・正倉	松尾2011、平石2019
島根半島東部	薄井原古墳	前方後円墳・50m・横穴式石室２基	後期中葉（TK10型式新相）	松江市坂本町	「太田」地名・『出雲国風土記』神宅臣金太理（秋鹿郡）	仁木2016、仁木2019a・平石2019
島根半島西部	上島古墳	円墳・20m・家形石棺と竪穴式石槨	後期中葉（TK10型式新相）	出雲市上島町	「美談（三太三）」（『出雲国風土記』出雲郡美談郷の郷名由来記事）・県社・正倉	仁木2016、仁木2019a・平石2019
出雲平野	大念寺古墳	前方後円墳・92m・横穴式石室	後期後葉（TK43型式古相）	出雲市今市町鷹ノ沢	「神門郡日置郷」・「日置伴部」（『出雲国風土記』神門郡日置郷の郷名由来記事）	仁木2016、仁木2019a・b、池淵2019a・平石2019
	塚山古墳	円墳・30m・横穴式石室	後期後葉（TK43型式～ＴＫ209型式）	出雲市今市町塚根		
	半分古墳	前方後円墳・34m・横穴式石室	後期後葉（TK43型式古相）	出雲市上塩冶町半分		
	上塩冶築山古墳	円墳・46m・横穴式石室	後期末（TK43型式新相～TK209型式）	出雲市上塩冶築山		
	地蔵山古墳	円墳？・10数m～25m以上・横穴式石室	後期末（TK209型式）	出雲市上塩冶町池田		
	妙蓮寺山古墳	前方後円墳・・横穴式石室	後期後葉（TK43型式古相）	出雲市下古志町	「神門郡古志郷開発伝承」（『出雲国風土記』神門郡古志郷の郷名由来記事）	仁木2016、仁木2019a・b、池淵2019a
	宝塚古墳	横穴式石室	後期末（TK43型式新相～TK209型式）			
	放れ山古墳	円墳・13m・横穴式石室	後期末（TK43型式新相～TK209型式）	出雲市古志町		
大田市静間川水系	城山古墳	円墳・不明・横穴式石室	後期後葉（TK43型式期）	大田市大田町城山	「大田」地名	松尾2019
	加土古墳	切石を用いた横穴式石室墳	後期後葉（TK43型式期）	大田市大田町加土		
	行恒古墳	円墳・径25m・横穴式石室	後期後半（TK10～TK43型式期）	大田市久利町行恒	西隣部に「大田」地名	
仁摩平野周辺	明神古墳	円墳・径20m、高３m以上・横穴式石室	後期後葉～終末期（TK43～TK217型式期）	大田市仁摩町仁万	北隣部に「宅野」地名・（邇摩郡託農郷）	本稿・菱田2019
	赤井穴ケ迫古墳	墳形・－・石棺式石室（切石造り）？	後期末（TK209型式併行期）	大田市五十猛町赤井	南隣部に「宅野」地名・（邇摩郡託農郷）	
浜田市下府町	片山古墳	円墳・径11m、高６m・横穴式石室	後期末（TK209型式併行期）	浜田市下府町片山	西隣部に「三宅」地名	菱田2019
浜田市周布川	めんぐろ古墳	円墳・－・横穴式石室	後期前葉（MT15型式期）	浜田市治和町三宅	「三宅」地名・古墳時代前期末～中期前葉：周布古墳（前方後円墳・74m）	松尾2009・菱田2019
益田平野周辺	小丸山古墳	前方後円墳・50m・不明	後期前葉（MT15型式期）	益田市乙吉町小丸山	南隣部に「三宅」地名・古墳時代前期後葉～中期初頭：大元1号墳（前方後円墳・88m）・スクモ塚古墳（前方後円墳・94m？）	仁木2019a・吉松2019
	鵜ノ鼻古墳群	前方後円墳ほか50基以上・横穴式石室	後期後半（TK10～TK43型式期）	益田市遠田町字塚穴原・鵜ノ鼻	北隣部に「木部」地名（紀氏－海部氏関連）・南部に「三宅」地名	中司2011・池淵2015

奥津城と評価することができる。このことは、①墳丘規模と土壌改良の可能性がある墳丘築成、②石見最大規模の石室、③出雲東部地域に類似する石棺蓋と畿内系の刳抜式家形石棺の棺身（出雲西部、因幡・但馬の類例に類似）、④石西型の須恵器、⑤北陸・若狭を含め、京都府北部から山陰に広く地域的共通性を有する短頸腸抉柳葉形鉄鏃と出雲西部の首長墳と同質の片刃長頸鏃の副葬、⑥倭王権中枢からの直接的入手が濃厚な仿製鏡と銅鋺、金銅装圭頭大刀の副葬、⑤開拓的性格を暗示させる鉄製農工具の副葬から、窺うことができる。

最後に課題を記して、本稿のまとめとしたい。仁摩平野周辺を倭王権の開発・交通拠点－ミヤケ－と評価するならば、明神古墳の被葬者とその一族をミヤケの管掌者に位置づけることは可能であろうか？本稿では改めて明神古墳が石見有数の首長墳であることを追認し得た。今後は、鳥居原古墳をはじめとする複数の有力首長墳や横穴墓群をはじめ、かつて古代里制地割が存在した仁万田台を潤す潮川の祭祀遺跡（清石遺跡・５世紀前葉）など、実資料に即した地域研究の深化と、その批判的研究の展開を課題の一つとしたい。

おわりに

本稿は、2020年12月時点で実資料を確認できた明神古墳出土品を中心に報告したものである。また、明神古墳の調査所見については、愛護協会報告と門脇資料に依拠したものである。門脇資料については、墳丘測量図や遺物出土状況、石棺の実測図等々が散逸しており、概要が残されているのみである。明神古墳については、これまで当時の調査に関与された関係者の方々から、調査担当者の門脇俊彦氏が故人となられてからも正式報告書の刊行に取り組むべき重要古墳であるとの想いを聞いてきた。本稿は、そのような先学の志には到底至らないものであるが、冒頭に記したように島根県の古墳時代研究の一環として行った資料調査の成果を公表する目的で記したものである。ここに関係各氏はもとより広く学界諸賢のご叱正を請うものとして、擱筆する。

謝　辞

本稿を成すにあたっては、明神古墳出土須恵器の資料調査を共にした田中　大 氏をはじめ、下記の方々と関係機関に大変お世話になりました。心より御礼申しあげます。

池淵俊一、岩本真美、遠藤浩巳、角田徳幸、門脇俊子、川原和人、佐藤　功、澤田正明、柴田伊廣、清水憲一、椿真治、中田健一、西尾克己、丹羽野裕、野島智美、藤井由香、松本岩雄、三宅博士、桃崎祐輔、守岡正司、吉松大志、吉松優希（敬称略・五十音順）

大田市教育委員会石見銀山課
島根県古代文化センター
島根県埋蔵文化財調査センター
島根県立古代出雲歴史博物館

【註】

（１）当時の調査に参加された角田徳幸氏のご教示による。

（２）桃崎祐輔氏の教示によると、本例の蓋部断面は内面天井が平坦で、宝珠の台部の肥厚が弱いⅢ期の特徴を有するが、法量的にはⅢB期の宮地嶽古墳例、蓋上面が平坦な点でⅢB期の谷奥１号墳例に類似している。同じく、一般論的に精良で遺存が良いものは、隋からの舶載品で高錫銅二元合金、劣化の激しいものは国産の銅錫鉛三元合金であるため、本例は遺存状態の悪さから国産段階の可能性が指摘されている。

（３）例えば、石川県能美市の西山１号墳、七尾市の三室まどがけ１号墳、福井県大飯郡おおい町の大飯神社１号墳、鯖江市の天神山古墳群三ツ禿10号墳等で確認される。

【引用・参考文献】

池淵俊一2015「益田平野周辺部における鵜ノ鼻古墳群の位置付けをめぐる諸問題」『益田市内における古墳の調査　金山古墳・鵜ノ鼻古墳群・北長迫横穴墓群』（島根県古代文化センター調査研究報告書49）

池淵俊一2019b「出雲平野における６・７世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』

池淵俊一2019a「考古資料からみた出雲東部における国造制・部民制成立期に関する覚書」（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター

出雲考古学研究会編1987「石棺式石室の研究」『古代の出雲を考える』６　出雲考古学研究会

岩本　崇2014a「北近畿・山陰における古墳の出現」『博古研究』第48号

岩本　崇2014b「銅鏡副葬と山陰の後・終末期古墳」『兵庫県香美町村岡　文堂古墳』（大手前大学史学研究所研究報告第13号）大手前大学史学研究所・香美町教育委員会

岩本真美2019「石見地域における須恵器の編年と地域性－「石見型須恵器」再考－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター

大谷晃二1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
大谷晃二2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』（平田市埋蔵文化財調査報告書第８集）
大谷晃二・松尾充晶2004「島根県装飾付大刀と馬具出土古墳・横穴墓一覧（改訂版）」『島根考古学会誌』第20・21集合併号
大谷晃二2011「三　山陰」『講座日本の考古学７　古墳時代（上）』青木書店
大谷晃二2018「３　古天神古墳出土大刀の時期と系譜」『古天神古墳の研究』（島根大学考古学研究室調査報告第17冊）
大谷晃二2019「出雲地方の横穴式石室・石棺・横穴墓の諸形態とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
角田徳幸2004「山陰地域の家形石棺」『大王のひつぎ海を渡る－宇土馬門石製家形石棺の謎－』第７回九州前方後円墳研究会・第1回石棺文化研究会資料集
角田徳幸2007「山陰における九州系横穴式石室の様相」（杉井健　編『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会2007年度熊本大会分科会Ⅰ記録集　北九州中国書店）
角田徳幸2008「出雲の石棺式石室」（土生田純之　編『古墳時代の実像』吉川弘文館）
角田徳幸2009「山陰・北陸の九州系横穴式石室」『考古学ジャーナル』583
勝部　昭1986「隠岐島の古墳」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会編
菊地芳郎2010「第３章　装飾付大刀の系譜とその展開」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
島根県古代文化センター2015『前方後方墳と東西出雲成立にかかる研究』（島根県古代文化センター研究報告書第14集）
島根県文化財愛護協会1987「新指定文化財二件」『季刊文化財』五七号
島根県矢上高校古墳研究会2012「大田市行恒古墳の測量調査報告」『島根県考古学会誌』第29号　島根県考古学会
土屋隆史2018「４　古天神古墳出土鉄鏃の位置づけ」『古天神古墳の研究』（島根大学考古学研究室調査報告第17冊）
豊島直博2002「後期古墳出土の鉄鏃の地域性と階層性」『文化財論叢』Ⅲ奈良文化財研究所
中司照世2011「古墳の比較検討から見た古代イズモの特質」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター
仁木　聡2011「古墳時代前期における本州島西部の枕について－山陰地方における古墳被葬者集団の地域間交流の分析を中心にして－」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター
仁木　聡2016「継体・欽明朝における出雲の池溝開発について－東西出雲成立の史的画期－」『塚口義信博士古稀記念　日本古代学論叢』同記念会　和泉書院
仁木　聡2019a「継体・欽明朝における出雲の画期」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
仁木　聡2019b「『出雲国風土記』神門郡条記載の「池」と大念寺古墳の時代」『大阪府立狭山池博物館研究報告』10　大阪府立狭山池博物館（初出2017）
仁摩町1973『仁摩町誌』
菱田哲郎2019「地域の開発と後期古墳－プレ律令国家期の地域社会の形成－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
平石　充2004「出雲西部地域の権力構造と物部氏」『古代文化研究』12　島根県古代文化センター
平石充・松尾充晶・佐藤綾子編2005『装飾付大刀と後期古墳－出雲・上野・東海地域の比較研究－』（島根県古代文化センター調査研究報告書31）
平石　充2019「出雲地域におけるミヤケについて」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
松尾充晶2009『めんぐろ古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書42
松尾充晶2001「装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』（島根県古代文化センター調査研究報告書10）
松尾充晶2019「古墳時代の開発と地域形成－石見国安濃郡域を素材に－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
三木　弘2004「鍬・鋤先からみた玉手山10号墳」『玉手山古墳群の研究Ⅳ－副葬品編－』柏原市教育委員会
桃崎祐輔2000「風返稲荷山古墳出土銅鋺の検討」『風返稲荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会・日本大学考古学会
桃崎祐輔2020「ＩＸ　金鈴塚古墳出土銅鋺の検討」『千葉県木更津市　金鈴塚古墳出土品再整理報告書』木更津市教育委員会
吉田知史2007「文様と形態からみた後期古墳出土鏡の編年」大阪大学文学部研究科考古学研究室
吉松大志2019a「国家形成期の石見地域と地域間関係－佐波をてがかりに－」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
吉松大志2019b「隠岐の古墳・横穴墓と部民」『国家形成期の首長権と地域社会構造』（島根県古代文化センター研究論集　第22集）島根県古代文化センター
渡邊貞幸2005「２章　地域王権の時代」『島根県の歴史』

山川出版

【遺跡引用文献】
（石川県）
西山１号墳：吉岡康暢・河村好光編1997『加賀能美古墳群』能美市・能美市教育委員会
三室まどがけ１号墳：橋本澄夫1960「三室古墳群」『能登高木森古墳』七尾市文化財保護委員会
（福井県）
大飯神社１号墳：宮崎　認2003「１．大飯神社１号墳」『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群－近畿自動車道敦賀線建設事業に伴う発掘調査－』（福井県埋蔵文化財調査報告　第75集）福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
天神山古墳群三ツ禿10号墳ほか：斉藤　優1973『天神山古墳群』鯖江市教育委員会
（三重県）
鳥居古墳：杉谷政樹・間渕　創2015「鳥居古墳の石棺・赤色顔料と若干の問題について－『鳥居古墳』発掘調査　補遺－」
（兵庫県）
二見谷１号墳：兵庫県教育委員会文化課 1975 『二見谷古墳群』城崎町教育委員会
（鳥取県）
奥谷１号墳：気高町教育委員会編1977『気高町誌』
黒本谷古墳：中島博恭1984『中河原古墳・黒本谷古墳発掘調査報告書』
高野坂９号墳：岩美町教育委員会1992『高野坂古墳群発掘調査報告書』（岩美町文化財調査報告書第17集）
宗像１号墳：東方仁史2003「米子市宗像１号墳出土資料について」『鳥取県立博物館研究報告』第42号
（島根県）
赤井穴ケ迫古墳：山本　清1962「古墳の示す三瓶周辺の文化」『山陰文化研究紀要三号』
鵜ノ鼻古墳群：横山純夫1978「古代の石見」『八雲立つ風土記の丘』№33　島根県立八雲立つ風土記の丘
上島古墳：花谷　浩2007「上島古墳出土遺物」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集
薄井原古墳：山本　清・近藤　正1962『薄井原古墳調査報告書』島根県教育委員会
大座西２号墳：横田　登・野津研吾2006『大座西遺跡発掘調査報告書』隠岐の島町教育委員会
上塩冶築山古墳：松本岩雄編1999上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター、坂本豊治(編)2018『上塩冶築山古墳の再検討』(出雲弥生の森博物館研究紀要第６集)
上塩冶横穴墓群第23支群５号穴：守岡正司1998『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群（第７・12・22・23・33・35・37支群）』島根県教育委員会
片山古墳：大谷晃二1993「片山古墳測量調査報告書」『下国府廃寺跡』浜田市教育委員会
加土古墳：島根県大田市1968『大田市誌　十五年のあゆみ』島根県大田市
清石遺跡：長峯康典・新林尚美1998『清石遺跡外発掘調査報告書（（主）仁摩瑞穂線　大国工区特別県単（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）』仁摩町教育委員会
小丸山古墳：木原　光1990『小丸山古墳発掘調査報告書』益田市教育委員会
城山古墳：1968『大田市誌　十五年のあゆみ』、島根県大田市・大田市教育委員会石見銀山課2019～2020年度調査
大念寺古墳：勝部　昭・西尾克己編1980『出雲・上塩谷地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会
多沢横穴墓：内田律雄1996『新修知夫村誌』知夫村
立石古墳群：山本　清1955『隠岐古墳調査報告　附同先史遺跡の概要』
地蔵山古墳：勝部　昭・西尾克己編1980『出雲・上塩谷地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会、原　俊二2020「上塩冶地蔵山古墳の墳丘測量調査報告」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第８集
塚山古墳：勝部　昭・西尾克己編1980『出雲・上塩谷地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会、花谷　浩2020「出雲市今市町塚山古墳余録」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第８集
鳥居古墳：山本　清1973「原始・古代」『仁摩町誌』仁摩町
放れ山古墳：大谷晃二・松尾充晶1999「放れ山古墳」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
妙蓮寺山古墳：山本　清1964『妙蓮寺山古墳調査報告』島根県教育委員会
めんぐろ古墳：松尾充晶2009『めんぐろ古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書42
行恒古墳：島根県八上高校古墳研究会2012「大田市行恒古墳の測量調査報告」『島根考古学会誌』第29号
（福岡県）
宮地嶽古墳：池ノ上宏・花田勝弘1999「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第85巻第１号　日本考古學會

【図版】
図１～６：筆者実測・作図（うち、図４－２・３・４は田中大氏の実測）
図２の空撮写真（1947年10月３日GHQ撮影）
写真の出典　国土地理院ウェブサイト
https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1181449&isDetail=true
https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1181395&isDetail=true

遺構・遺物の写真図版は島根県古代文化センターに保管されている門脇資料による。

1. 明神古墳遠景（南から）

2. 明神古墳墳頂部

3. 明神古墳からの眺望（西方向）

4. 明神古墳からの眺望（南方向）

5. 天井石（奥壁）南から

6. 墳丘土層断面（石室側）

7. 墳丘土層断面（石室側）

8. 墳丘土層断面（石室側）

明神古墳　調査写真（１）

9. 墳丘土層断面 (石室側から墳端方向)

10. 墳丘土層断面 (墳端)

11. 石室北側の墳丘断面 (東から)

12. 石室北側の墳丘断面 (西から)

13. 奥壁天井石（西から)

14. 奥壁天井石と石室内部 (東から)

15. 石室内部の土層堆積 ① (南から)

16. 石室内部の土層堆積 ② (南から)

明神古墳　調査写真（ 2 ）

17. 石室羨道部 (東から)

18. 石室完掘状況 (東から)

19. 石室全景（南東から)

20. 石室全景 (東から)

21. 石棺 (身) 検出状況 (東から)

22. 石棺 (蓋・身) 出土状況 (北から)

明神古墳　調査写真（3）

23. 石棺 (蓋・身) 出土状況 (東から)

24. 石棺 (蓋) 出土状況 (東から)

25. 石棺 (身) 内部 (東から)

26. 石棺復元状況 (東から)

明神古墳　調査写真（４）

27. 石棺復元状況 (南から)

28. 石棺復元状況 (北から)

29. 石棺 (身) 東側小口外面 (東から)

30. 石棺 (身) 東側小口内面 (西から)

31. 石室内部 (石棺復元後 ①) (東から)

32. 石室内部 (石棺復元後 ②) (東から)

33. 石室内部 (石棺復元後 ③) (東から)

明神古墳　調査写真（5）

34. 遺物出土状況 (1) －石室北西隅（南から撮影）－

35. 遺物出土状況 (2) －同上－

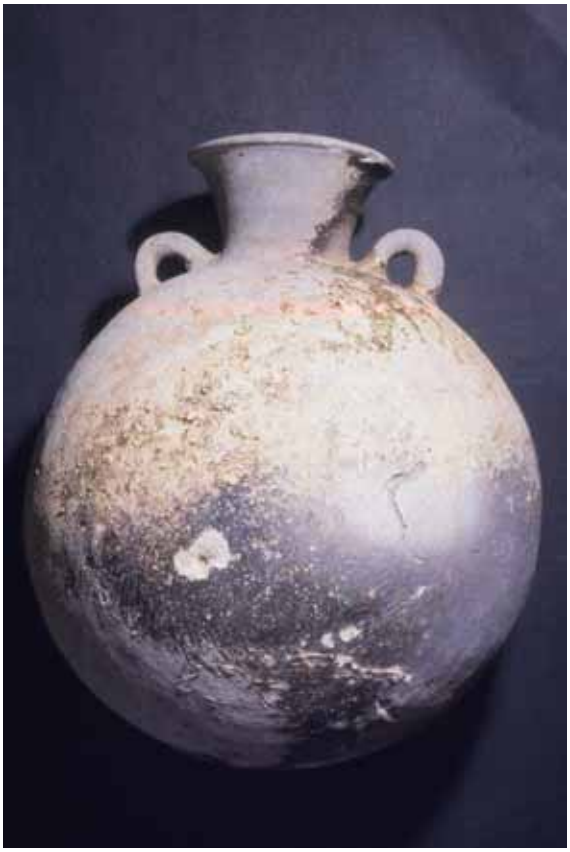
明神古墳　調査写真（６）

36. 遺物出土状況 (3) －石室北西隅（南から撮影）－

37. 遺物出土状況 (4) －石室東南隅（西から撮影）－

明神古墳　調査写真（７）

1. 提瓶 (1)



2. 提瓶 (2)

3. 瓿

4. 台付直口壺

5. 坏蓋

明神古墳　出土品（1）

6. 金銅装圭頭大刀

7. 圭頭部

8. 鉄斧

明神古墳　出土品（2）

9. 刀子

10. 短刀

11. 銅鋺

明神古墳　出土品（3）

12. 鍔・耳環・鏡片

13. 鉄鏃

明神古墳　出土品（4）